国際的な視野に立った日本語・日本研究共同教育プログラム

北京大学・東北大学共同ワークショップ実施報告

2012 年 3 月 1 日、北京大学にて、北京大学外国語学院日語系、及び東北大学大学院国際文化研究科による共同ワークショップが開催された。本研究科からは 4 名の学生と 2 名の教員が派遣され、北京大学の教員、学生と学術交流を行った。

まず、当日のプログラムを簡単に記しておく。ワークショップは、北京大学の李奇楠副教授による司会進行のもと、北京大学外国語学院日語系を代表して于栄勝教授による開催の挨拶に始まり、続いて、東北大学及び国際文化研究科の簡単な紹介を江藤が行った。

ワークショップ会場前にて

オープニングの後は、中日の学生による研究発表が交互に行われた。発表者と演題は次のとおりである。

堀田智子（本研究科　異文化間教育論講座　博士課程３年）

日本語学習者の「断り」行動におけるヘッジの考察：中間言語語用論分析を通じて

呉際（北京大学　修士課程３年）

日本語の「不満表明」についての一考察：ドラマに見られる「不満表明」を中心に

呂萍（本研究科　言語文化交流論講座　博士課程３年）

電話および対面会話におけるあいづちの中日対照研究：使用頻度と出現位置に着目して

李海浩（北京大学　博士課程１年）

翻訳と異文化コミュニケーションに関する再認識

金炫姈（本研究科　言語コミュニケーション論講座　博士課程３年）

翻訳規範の差異が翻訳文に与える影響：『雪国』の韓・英訳の対照分析

郭暁麗（北京大学　博士課程１年）

『道草』論：生存の余裕なさについて

坂本祐太（本研究科　言語科学基礎論講座　修士課程２年）

日本語とモンゴル語における多重分裂文の（不）可能性

陳家賓（北京大学　学部課程４年）

日本語における擬容語の中国語訳について

発表の様子（坂本祐太君）

発表終了後、本研究科を代表し、本プロジェクトを推進された小野尚之教授が今回の総括として閉会の辞を述べられた。

発表題目からわかるように、今回のワークショップでは、日本語、日本文学、日本文化について多岐にわたるテーマで発表がなされた。各発表は 30 分で、プレゼンテーションが 20 分、続いて 10 分程度の質疑応答、そして、双方の大学の教員による指導的コメントがなされた。いずれの発表も学術的レベルの高いもので、プレゼン技術も満足のいくものであった。

１つのセッションが 2 名の発表、つまり 1 時間だが、興味深い内容と、学生の発表の巧みさゆえか、あっという間に時間が過ぎた感があった。発表のみならず、司会進行もすべて日本語で行われ、その意味で異国の地にいることをしばし忘れてしまう雰囲気であった。北京大学と東北大学の学生と教員のコラボによる今回の学術交流は、「国際的な視野に立った日本語・日本研究共同教育プログラム」の可能性を模索し、推進していくための貴重な一歩として双方の参加者に記憶されたことと思う。

ワークショップの終了後は、北京大学主宰による懇親会が催され、発表した学生、聴講に来た学生、そして双方の教員たちが卓を囲み、和やかな空気の中で親睦を深めた。「熱烈的歓迎」ではないが、中国の皆さまから心のこもったご歓待をいただき、われわれは到着から出発までの滞在期間中まさに至れり尽くせりのおもてなしを受けた。この場を借りて、北京大学外国語学院日語系の教員、学生の皆さんには心から感謝の言葉を申し上げたい。

本プロジェクトは、北京大学との国際共同教育プログラムの構築を目指し、共同ワークショップの実施で相互に学生と教員の交流事業を行うことを目的としたものだが、すでに、第 1 段階の事業として、2012 年 1 月 26 日～30 日に北京大学から教員 2 名と大学院学生 3 名を招き、東北大学にて国際共同教育ワークショップを開催した。その際、来校された 2 名の教員が今回の共同ワークショップにて中心的な役割を担ってくださった于栄勝教授と李奇楠副教授である。また、その時に東北大学で発表した北京大学の学生たちも、今回われわれの世話役として大いに活躍してくれた。

このような共同教育プロジェクトの教育的な意義は大きいと考える。特に、大学院教育の中で国際文化交流の感覚を身につけることができるのは重要なポイントであろう。今回参加した本研究科の学生たちは、公式プログラムだけでなく、親睦会等での交流を通して国際交流の意義や重要性を感じとったことと思う。これは、本研究科の教育理念のひとつである、国際交流、国際協力についての深い識見を備えた人材の育成をまさに実践するものと言えよう。

そして、嬉しいことに、本研究科の留学生や修了生が、少なからずワークショップに集まってくれた。母国である中国にたまたま帰省していた学生や、本研究科を修了して北京の大学で教鞭を取っている元学生が参集してくれたのだ。こういう国際的なネットワークを構築し、拡充していくことも本研究科の使命のひとつであろう。

最後に、報告者の私が感じた今回の海外研修の最大の収穫のひとつは、学生、それも普段大学で話す機会の少ない他講座の学生諸君と数日行動をともにし、移動の合間や食事などのちょ

っとした時間に研究や勉強のことなど、いろいろと話しができたことである。フリーな場での会話で質問をされたり意見を求められるのは、あらかじめ準備をしていく講義や演習とは違って、こちらの実力というか、見識のようなものが試されるのだが、学問や研究の話しに限らず、いろいろなことを本音で語る機会は学生にとっても、教員にとっても貴重である。その意味でも、今回のようなプロジェクトは今後も継続して行っていくべきであろうという意を強くした次第である。　（文責：江藤裕之）

北京大学の皆さんと（懇親会後）

《参加した学生たちからの感想》

堀田智子（異文化間教育論講座　博士課程３年）

ワークショップでの発表時には、北京大学ならびに東北大学の先生方、学生の皆さんから貴重なコメント、アドバイスをいただきました。特に、北京大学の先生から同じテーマで研究をされている卒業生の方を紹介していただいたことは、大きな収穫の１つでした。発表後は、自身の研究領域とは異なる様々なご発表を拝聴しました。日本語を対象とした研究を進めている私にとっては、新たな視点を得る良い機会となりました。今後の研究にぜひ活かしていきたいと思います。また、ワークショップ後に行われた懇親会での北京大学の皆さんとのやりとり、移動中に先生方や他講座の学生の皆さんから伺った研究の面白さ、厳しさなどに関するお話もとても興味深く、いい刺激となりました。今回の研修旅行への参加は、「研究」と改めて向き合う意義深いものでした。このような貴重な機会をいただきましたことを心より感謝申し上げます。

呂萍（言語文化交流論講座　博士課程３年）

東北大学国際文化研究科の一員として、母国にある北京大学で発表することができ、本当に幸せで、ありがたく感じております。今回のワークショップを通じて、北京大学の学生たちがどういった研究をしているのかを知ることができ、皆さんの日本文化・日本文学について多岐にわたる発表を聞かせていただき、たいへん勉強になりました。そして、北京大学の先生や学生の皆さんから私の研究について貴重なコメントをいただきました。今後の研究の参考になる

と思います。ワークショップが終了した後、開かれた懇親会で両校の先生方々、学生の皆さんと和やかな雰囲気の中で、研究生活などを話し合い、互いの交流を深めました。最初の発表会から最後の懇親会まで、まさに国際的視野に立った交流であると思います。

金炫妸（言語コミュニケーション論講座　博士課程３年）

今回の共同ワークショップは、「国際的な視野に立った日本語・日本研究共同教育プログラム」の構築を目指す本プロジェクトの目的に相応しい、日本語を通した国際交流及び日本研究の現状を実感できる良い機会であった。まず、共同ワークショップでの発表と北京大学の先生方々及び学生との交流会を通して、新たな視点から研究上の有益なコメントを多くいただくと共に、共通の関心事である日本語・日本研究を媒介とした国際交流及び文化理解を深めることができた。そして、個人的に、中国を訪れたのは今回が初めてで、滞在期間中に体験するもの全てが新鮮な毎日であったが、短い期間とはいえ、直接その国を経験することで、これまで漠然としか分からなかった中国という国、さらに中国からの留学生のことをもう少し理解できるようになった。最後に、北京での滞在期間中心暖かいおもてなしをいただいた北京大学の皆さんに、この場を借りて改めて心よりお礼を申し上げたい。

坂本祐太（言語科学基礎論講座　修士課程２年）

言語科学基礎論講座は今回から参加させていただくことになったので、私が初めて講座の代表として参加しました。研究科の他専攻並びに北京大学の日本語学科は認知言語学や語用論を主に研究しているので、私の専攻する生成文法理論は初めて聞く方もいたので、準備にすごく戸惑いました。しかしながら、このワークショップの経験を通して、「専門外の人にいかに分かりやすく伝えるか」「専門外の人にいかに自分の研究が面白いかを伝えるか」の２点に関して大変勉強になりました。また、研究科内でこれまで交流することのできなかった先生方や学生の方々に加え、北京大学の先生方や学生の方々と多くの交流を持つことは、普段の研究生活では決して得ることのできない機会であるため、今回のワークショップは自分にとって大変有意義なものでした。今回の経験を活かし、今後も研究生活に励んでいきたいと思います。